中学校一年生教科書における「音節」の項目について

堀畑正臣

一　問題の在処

日本語の音声学的な記述がここ数年来の新たな中学一年生の教科書に記述されだした。中学校の検定教科書五社のうち、三社に日本語の音声、音節等の記述がある。これらは日本語についての知見を与え、言葉に興味関心を持たせる点で歓迎すべき傾向である。今回、大学三年生の教育実習において、ある教科書の日本語の音声の単元が取り上げられた。それを見ていて、教科書の説明と日本語学で説明している事に違いがあることに気がついた。早速、実習校の指導の先生とも相談してみたら、どの教科書も同じ説明で、日本語学の説明とは違っていた。教科書の説明は、中学一年生に指導する点で簡略化したということも考えられるが、中には間違った内容を含んだ問題を解かせているので、中学生も釈然としない印象であった。本稿は教科書教材における音声・音節等を取り上げ、その問題点と対応策を述べる。

一　中一教科書の音声の単元における「音節」について

中一教科書における音声関係の単元の説明について、三つの教科書の項目を見てみよう。

一の1　A社　日本語の探検－1「音声の働きや仕組み」

表一は、A社の教科書の音声関係の単元に取り上げられている内容である。表一の（　）内は、その言葉は出てこないが、それについての説明があるもの、【　】内は、それにつ

いての説明がないものである。

A社の教科書では、「音声の働きや仕組み」という単元（24～25頁）を設定し、その中ではじめに「音声の働き」として、次のように述べる。

●音声の働き

人が言葉を伝え合うときに使う音を、音声という。音声の最も重要な働きは、語や文を区別することである。例えば、「はがき」という語から、一部の音声を変えると、「はがき→はたき→かたき」のように全く違った語ができる。これらをローマ字で表すと、[hagaki／hataki／kataki]となり、それぞれの違いが、[g／t／h／k]の違いに基づくことが分かる。

[g・t・h・k] などを子音、[a・i・u・e・o] を母音という。子音と母音の組み合わせを変えることで、さまざまな語を表すことができる。母音の数は五個、子音は十数個と少ないが、これらを組み合わせることで、何万、何十万という語を区別できるのである。

（A教科書、24頁上4行～15行）

傍線部では、「音素」という語は使用しないが、「音素」の内容を説明しているものである。その後、子音と母音を説明している。

●音声を作り出す仕組み

音声は主に肺から吐き出される空気の流れによって作られる。その空気を、喉（声帯）、舌・唇などで調節しながら、口または鼻から出すことで、音の違いを生み出している。

母音は、空気の流れをあまり妨げることなく出す音で、遠くまでよく聞こえる。これに対して子音は、舌や唇で空気の通り道を狭めたり閉じたりして出す音で、母音に比べると聞こえにくい。

また、声帯を振動させるかどうかでも、音の種類に違いが生まれる。声帯が振動して出る音には [g・z・d]

表1　A社　日本語の探検1「音声の働きや仕組み」

項目	事項
音声の働き	（音素）、子音、母音
音声を作り出す仕組み	（音声器官・発声の仕組み）（有声・無声）、【濁音】
音節	音節、【拍】、促音・撥音・長音（特殊音素）、拗音
イントネーション	イントネーション、プロミネンス
アクセント	アクセント

などがあり、振動しないで出る音には［k・s・t］などがある。つまり、「が・ざ・だ」と「か・さ・た」の違いは、声帯を振動させているかどうかの違いである。

●音節

音節とは発音の単位であり、ひとまとまりの音として捉えられるものをいう。日本語の場合、音節は、子音一つと母音一つの組み合わせ、または母音一つで作られるのが基本であり、原則として「あ・か・さ・た・な」などの仮名文字一つで表される。和歌や俳句で、五音・七音などと数える場合も、この音節が単位となっている。「あ・か・さ・た・な」などの基本の音節の他にも、次のような音節がある。

促音……「っ」
撥音……「ん」
長音……「ぼうし」「こおり」「ノート」など
拗音……「きゃ」「じゃ」「ぴゃ」など

促音・撥音・長音は、発音するとき、それぞれ前の音と強く結び付いて切り離しにくい。しかし、「あ」などと同じ長さで発音するため、それだけで一つの音節である。拗音は、「きゃ」など二文字で表されるが、長さは「あ」などと同じなので、一つの音節と見なされる。

（A教科書、24頁上12行～25頁上14行。波線は私に付した。）

この後の、●イントネーションと●アクセントについては省略する。

一の2　B社　言葉の研究室②「日本語の音声」

表二はB社の音声関係を取り上げたものである。B社は「　」日本語の音声」という単元を（198～201頁）設定し、日本語の音声について詳しく述べている。（　）内と【　】内については、表一と同じである。

表二　B社　言葉の研究室②「日本語の音声」

項目	事項
（音声の働き）	（言語記号の恣意性）、（音素）、子音、母音、音節、（有声・無声）、【濁音】
五十音図（音声を作り出す仕組み）	音節、【拍】、濁音、半濁音、拗音、促音・撥音・長音（特殊音素）、濁音と清音、（音声器官・発声の仕組み）
アクセント	アクセント
イントネーション	イントネーション、（プロミネンス）

単語はそれぞれ一定の音と意味をもっています。例えば、「鳥」という単語を例にとってみると、一定の音というのは「ト」「リ」という音がこの順序で並んでいることをいい、一定の意味というのは、「つばさをもち、体全体に羽毛が生えていて、普通、空を飛ぶことのできる動物」といった内容のことをいいます。

しかし、「トリ」という音が実際の姿かたちや鳴き声などを表しているわけではありません。英語では、鳥のことを「バード」といいますが、「バード」も音そのものが実際の鳥を表しているわけではありません。鳥を表すためには必ず「トリ」とか「バード」という音で表さなければならないという理由はなく、たまたま日本語では「トリ」、英語では「バード」といっているにすぎないのです。

それでは、こうした音はどうやって作り出されているのでしょう。

口の中の動きがどうなっているか注意しながら、「カ・キ・ク・ケ・コ」と声に出してみてください。この五つの音のそれぞれの最初のところで、舌の中ほどの部分が上顎に触っているのがわかります。

それでは、「カ・キ・ク・ケ・コ」を「カー・キー・クー・ケー・コー」のように長く伸ばして発音してみてください。長く伸ばした音は、「アー・イー・ウー・エー・オー」のように聞こえるはずです。

「カ」を例にとってみると、舌が上顎についていることで出た音と、「ア」のように聞こえる音の組み合わせで、「カ」の音ができていることがわかります。最初の部分の音を子音といい、あとの部分の音を母音といいます。ローマ字では「ka」と書きますが、「k」が子音で「a」が母音です。

仮名一字で表される音のほとんどは、子音と母音の組み合わせでできています。これを音節といいます。私たちが、音を聞くとき、音節として聞き取ることはありますが、子音だけを取り出して聞いたりすることは、まずありません。音節は、そういう意味で基本的な単位だといえます。

【五十音図】（表は省略）

日本語の音節は、五十音図に示されているもの（清音という）の他に、次のようなものもある。

① 濁音…「ガ」「ブ」など。
② 半濁音…「パ」「プ」など。
③ 拗音…「キャ」「ジュ」など。
④ 促音…「ッ」。

⑤ 撥音…「ン」。

⑥ 長音…「ー」。

また、日本語の音節が「子音＋母音」でできているのに対し、英語や朝鮮語などでは、音節は、「子音＋母音＋子音」が基本的な構成になっています。上に掲げた五十音図（ここでは省略した）では、同じ横の段に並んでいる音は同じ母音をもっています。また縦の段は、子音が同じか似たような音です。ですから、五十音図は、日本語の音節を規則的に並べたものということもできます。

五十音図については、他にもおもしろいことがあります。

五十音図のいちばん上の段の音を、「ア」から順番に読んでいくと、「ア・カ・サ・タ・ナ・ハ・マ・ヤ・ラ・ワ」となりますが、このときに、子音がどのように発音されるか、注意してみましょう。

「カ」の子音は、舌を上の図の「カ」の位置（図は略す―硬口蓋の奥の位置のこと―私注）につけて発音します。他の音も、発音する際、舌がいちばん近づくところを図に示しました（サ、ザ、タ、ダ、ナが歯茎の位置、マ、パ、バが唇の上下の位置―私注）。「マ」の子音は舌が動いていなくて、唇（くちびる）どうしがくっついています。

こうしてみてみると、「カ」から「マ」まで、舌の位置が、五十音図の順にしだいに前のほうになっていくのがわかります。（B社　198頁～200頁上4行）

濁音とアクセント、イントネーションは省略する。

一の3　C社「音声のしくみとはたらき」

C社は「音声のしくみとはたらき」という単元（120～121頁）を設定して日本語の音声について説明している。表三はC社の「音声のしくみとはたらき」の事項である。

表三　C社　言葉の研究室②「日本語の音声」

項目	事項
日本語の音節	音節、【拍】、（音素）
五十音図の仕組み	子音、母音、濁音、半濁音、拗音、促音・撥音・長音（特殊音素）、外来語の音節
やってみよう	音節、子音、母音、外来語の音節

C社の場合は、1で「次にあげた短い文に共通する点はなんだろうか。声に出して読んでみよう。」として、①現代の標語、②江戸川柳、③都々逸をあげる。そして、「日本語の音節」、「五十音図のしくみ」として次のように述べる。

日本語の音節

1にあげた短い文は、声に出して読んでみると、全てとても調子がよく、心地よい響きがあります。実際に指を折って言葉の音数を数えてみると、

┌5┐ ┌──7──┐ ┌5┐
リサイクル　未来のための　努力です

のように五音と七音（又は八音）のまとまりからできていることがわかります。

この「指を折って数えられる音」の一つ一つを音節といいます（波線は私に付した）。「リサイクル」という言葉は、「リ」「サ」「イ」「ク」「ル」という五つの音節からできています。

音節の数はだいたい、かな文字の字数と一致します。一致しないのは、「どりょく（努力）」のように、小さい「ゃ」「ゅ」「ょ」を含んでいる言葉の場合です。

五音や七音の言葉の構成は、響きのよい日本語のリズムを生み出します。伝統的な短歌や俳句は、基本は五音と七音の組み合わせからできています。さらに、川柳、都々逸のような庶民的な文化や標語のような日常の言葉にまで、日本語のリズムが取り入れられています。

五十音図のしくみ

例えば「まがりかど」をローマ字で書くと、

ma ga ri ka do
（ま が り か ど）

となり、それぞれの音節は、a・i・u・e・oの母音と、それ以外の子音からできています。ただし、ア行の音節は、母音だけで表します。

五十音図は、日本語の音節を整理し、母音ごと、子音ごとにかなを規則的に表に並べたものです。五十音図の縦の列（行）には、いくつかの例外を除いて同じ子音が並んでいます。横の列（段）には同じ母音が並んでいます。

五十音図のア行からワ行までの基本的な音節の他に、次のような音節があります。

濁音（ガ・ザ・ダ・バ行）
半濁音（パ行）
拗音（キャ・シャ・チャ・ニャ・ヒャ・ミャ・リャ・ギャ・ジャ・ヂャ・ビャなど）
撥音（はねる音。「ン」と書く。）
促音（つまる音。「ッ」と書く。）
長音（のばす音。「ウ」「オ」などと発音し、かたかなでは「ー」と書く。空気（クーキ）、扇（オー

ギ）など）

また、外来語などには、「シェ」「ファ」「ティ」などの、さまざまな音節が使われています。

また、（やってみよう）という課題の1に次のようなものがある。ここには後述するように問題点が含まれる。

（やってみよう）

1　次の語は幾（いく）つの音節からできているか、数えよう。

また、ローマ字で書いて、子音と母音に分けてみよう。

①車　②ランドセル　③地球　④雨やどり

⑤文明開化　⑥愛着　（C社120頁～121頁）

二　音節の記述の問題点

日本語学（『改訂版　日本語要説』「第五章　現代語の音声学・音韻論」土岐哲担当、ひつじ書房、二〇〇九年）では、まず音声と音素をわけ、それにアクセント素を加え、音韻は「音素とアクセント素」とする（『同書』119頁）。音声は具体的な音であり、音素は抽象的なもので意味の識別に関与するものである。中学校一年生の教科書にそこまで専門的な記述は求めないが、問題はその先にある。日本語学では音素の種類に次の四つをあげている。佐伯哲夫・山内洋一郎編『国語概説』（和泉書院、一九八三年初版）より示す。

①　母音音素――/a/　/i/　/u/　/e/　/o/

②　半母音音素――/j/　/w/

③　子音音素――/ʔ/　/k/　/g/　/ŋ/　/s/　/z/　/c/　/t/　/d/　/n/　/h/　/p/　/b/　/m/　/r/

④　特殊音素――/N/　/Q/　/R/

（佐伯哲夫・山内洋一郎編『国語概説』18頁）

『改訂版　日本語要説』（「第五章　現代語の音声学・音韻論」）の「音節」の説明を紹介すると、次のようである。

日本語で［tsüi］（机）といった場合、日本語母語話者は［tsüi］と［kɯ］の直後に切れ目を認め、全体として三つに区切って発音できる。

これに対して、英語で［fiŋgə］（finger）といった場合、英語母語話者は［fiŋ-］の直後だけに切れ目を認め、全体として二つに区切って発音する。また、双方共にそれ以上短く区切って発音することはできない。

このように、その直前に切れ目があって、ひとかたまりとして発音される最小の単音連続（または、「机」の［e］のような単独の母音）を「音節」（syllable）という。

（中略）

音節はまた、母音で終わるかどうかによっても分類される。上記の例でいえば［tsüi］［kɯ-］［e］などは「開音節（open syllable）」、［fiŋ］は「閉音節（closed syllable）」

である。

日本語の音節を考える場合、上記のように単音連続を調音法による音色などの「聞こえ」を中心とした観点から区切って説明しようとする「音節」という単位とは別に、単音連続を「音数律的な観点から区切って得られる時間的単位（村崎氏1990）」として、観念的な（頭ではそのつもりであっても、必ずしもその通りに実現されるとは限らない）「拍」あるいは「モーラ」という単位がある。

この拍あるいはモーラの単位では先にもふれたように「撥音（はねる音）」や「促音（つまる音）」それ自体が一つの拍あるいはモーラと認められる。

（『改訂版　日本語要説』139～141頁）

つまり、特殊音素（もしくは特殊拍）として、「撥音（はねる音）N」「促音（つまる音）Q」「長音（引き音）R」「短母音ｉ」を認めるのである。ここで「短母音ｉ」は［ai］［oi］［ui］の第2音ｉに該当する。「恋ko·i」と「鯉koi」や「老いo·i」と「甥oi」の発音での母音ｉの長さの違いを区別するものである。後者の「鯉koi」「甥oi」のｉが「短母音ｉ」である。

「母音V＋特殊拍（N、Q、R、V）」の「オン、オッ、オー、オイ」は音節では各1音節で拍数としては2拍となる。

（『改訂版　日本語要説』「第五章　現代語の音声学・音韻論」の一四一頁の表を参照）

三　音節と拍の区別

こうして音節と拍の区別をしないまま、授業を行うと混乱が生じてくる。例えば、「漢文」（かんぶん）は、「音節」（syllable）の場合は、［kam·bun］で2音節となるが、拍の場合は［ka／m／bu／n／］（／ka／N／bu／N／）で4拍となるわけである。

ある教科書が問題に出している「ランドセル」や「文明開化」は特殊音素（特殊拍）を含んでいるので問題になる。勿論、音節と拍の違いをきちんと説明して区別しているのなら問題はないが、区別しないまま試験問題などに使用されたらやっかいである。

以下いくつか例を示す。

① 鯉「こい」は1音節で、2拍

② 恋「こい」は2音節で、2拍

③ 新聞紙「しんぶんし」は、音節では「しん／ぶん／し」で3音節、拍では「し／ん／ぶ／ん／し」で5拍

④ 骨董品「こっとうひん」は、音節では「こっ／とう／ひん」で3音節、拍では「こ／っ／と／う／ひ／ん」で6拍

③ 音楽学校「おんがくがっこう」は、音節では「おん／が／く／がっ／こう」で5音節、拍では「お／ん／が／く／が／っ／こ／う」で8拍

のようになる。特殊音素（もしくは特殊拍）が絡むと、音節数と拍数は違うことになる。そこを押さえておく必要があろう。

おわりに

今回、三年生の教育実習を見に行って、この音声関連の授業を観察した。日本語学で教えているのと教科書に載っているのとで違いがあり、急遽調べてみたわけであるが、日本語の音声関係の項目を取り上げているのは最近のことのようで全ての教科書にはなく、三社の教科書に見られた。どの教科書も「音声」と「拍」を明確に分けて説明しているわけではない。この点は工夫が必要であろう。

三〇年近く前、大学に勤務したとき、幼稚園課程の先生が質問に来られたことがあった。園児に手拍子を使い言葉を数えさせるとき、「来て［kite］」と「切手［kitte］」や「猫［neko］」と「根っこ［nekko］」の違いを手拍子ではうまく認識させられない。これはどうしたらいいかという質問であった。そのとき音節（シラブル）と拍（モーラ）の違いを説明したことがある。

方言の世界でも地域によっては、撥音、促音、長音を一拍分に数えない地域があり、これをシラビーム方言と呼んでいる。九州では鹿児島方言にこの傾向がある。もともと日本語には特殊音素（特殊拍）はなかった。それを取り入れながら、撥音の「ン」、促音の小さい「ッ」、長音（引き音）の「ー」を取り入れてきたのである。発声の仕方や表記の仕方などに特殊音素は捉えにくいものをもっている。日本人自体が長い年月をかけてこの特殊音素（特殊拍）を日本語の中に取り入れてきたのである。

日本語に付いての知見を教科書に取り入れていく試みは歓迎されるものである。しかし、日本語の歴史と日本語の理論をわかりやすく教科書に取り入れていく必要があろう。今後、教科書の記述の正確さと学校現場での工夫を期待したい。

参考文献

佐伯哲夫・山内洋一郎編『国語概説』（和泉書院、一九八三年初版）
工藤浩他著『改訂版　日本語要説』（ひつじ書房、二〇〇九年）

（ほりはた・まさおみ　熊本大学教育学部教授、昭和53年度卒）